

## 2012 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

二〇世紀の経験は、自由という理念の圧倒的なユウエツ性<sup>(1)</sup>を確認させるものだった。二〇世紀を通じて意図的・非意図的になされてきた社会的実験は、総体としての社会を構想する場合に立脚すべき究極の準拠として、自由を上回る理念はありえないのではないか、という確信を、ほとんど否定できない水準にまで高めたのだ。

このことを象徴的に代表している出来事は、言うまでもなく、二〇世紀末期における「冷戦の終結」である。社会主義体制の事実上の崩壊が示したことは、自由を上回る理念を掲げた社会システムが、どのような悲惨な末路を歩むことになるのか、ということである。逆に言えば、ここで、自由を基礎にしたシステムの抗いがたい魅力が、示されたのだ。

近代社会が発見したとき、この社会が自覚的に立脚した理念は、主要には二つあった。(個人の)自由と(個人間の)平等である。しかし、二つの理念は必ずしも両立しない。たとえば、自由な競争は、しばしば不平等を拡張する。二つの理念の内、相対的に平等を重視したのが、社会主義であった。もちろん、実現された社会主義体制は、平等な社会とはほど遠いものであったことは、よく知られている。だが、ともかく、社会主義という思想と実践が、資本主義の下での自由競争がもたらす富の圧倒的な不平等の是正ということに動機づけられたものであったということ、そして来たるべき理想の状態においては、この不平等は実際に解消されるはずであると構想されていたということ、これらのことは間違いない。これに対して、自由主義体制は、自由を相対的に重んずるシステムである。そこでは、平等は、基本的には自由に下属する理念として、すなわちすべての個人に均等に自由を保証するときに依拠する理念として、位置づけられた。もちろん、自由主義体制の下でも、たとえば福祉政策は、自由の理念とは独立した平等への配慮に基づくものである。だが、福祉は、体制の機能障害に対する補完的な対策と見なされるのが通例であり、その限りでは、基軸的な理念としては自由が保持されていた、ということが許されるだろう。社会主義の崩壊は、自由の理念に立脚して社会を構想していくことが不可避であることを教示した。すなわち、(2)を動かしがたい結論として示したのである。

他方、同じ二〇世紀の経験は、同時に、自由の困難を反駁はんばくしがたいものとして浮上させてもきた。二〇世紀末に近づくと、結果的に自由の困難を含蓄している社会問題への自覚が、急速に高まってきた。それは、人類の自由な振る舞いが地球の自然環境に対して破滅的な打撃を与えつつある、という問題である。地球の自然環境の維持という理念は、自由という理念と同じ程度にわれわれの社会構想にとって手放しえない方針である。しかし、これら二つの理念の間には、これから述べるような解消(3)しがた(4)い矛盾がカイトイされている。

人間の活動が自然に対して取り返しをつかない負荷を与えているということについての明確な思想的な自覚は、一九六〇年代の中盤から一九七〇年代の初期にかけての時期に、最初に現れた。この自覚は、今日では「環境問題」や「資源・エネルギー問題」の古典と目されている二つのテキストによって代表される。二つのテキストとは、一九六四年に出版されたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』と、一九七二年にローマ・クラブが提起した『成長の限界』である。カーソンのテキストは、その根底的な精神においては、今日でも十分に新しいが、そこで具体的に主題化されているのは、ほとんど、農業による公害に限られている。ローマ・クラブのテキストが表明しているのは、地球の地下資源の絶対量に限界があり、それはごく近い未来に枯渇してしまうことになるだろうという警告である。

<sup>(5)</sup>環境問題がこのような段階にある場合には、それは、自由主義と矛盾するものではない。自由の理念は、ありとあらゆる行為を自由に行うことを是認するものではない。社会の構成員ながらこうした自由を行使すれば、たちまち暴力的な衝突が発生するだろう。社会構想の理念としての自由には、自ずと制限が課される。すなわち、各人の自由は、他者の同様な自由を阻害しない限りにおいて、他者に危害を与えない限りにおいて、享受されるのである。自由主義のミニマムな定義は、他者に危害を与えない限りにおいて何をしてもよい、ということ、そして、その範囲が諸個人に対して明確に規定されていることである。ここでウゴされているのは、バーリンが「消極的」と形容した自由の類型(6)より重要であると通常見なされている方の自由の類型である。他者に暴力を振るう自由が認められていなかったとしても、このような意味での自由主義は否定されない。それと同じ意味において、『沈黙の春』のメッセージは自由主義と十分に両立しうる。カジヨウな農業の使用は、虫や鳥や、あるいは

それらを愛でる人々や危険な農業に冒された作物を食する人々に対する暴力のようなものである。同様に、自分の所得や所有物に限界があったとしても、何らかの所得や所有物が手元に残っている以上は、自由は否定されない。ローマ・クラブの警告が自由主義にとつて脅威でないのも、これと同じ理由による。

だが、一九八〇年代以降の環境問題の焦点は、この段階から明確にシフトしている。八〇年代からフロンガス等による地球のオゾン層の破壊が、そして八〇年代末以降は二酸化炭素等による地球の温暖化が、現在に至るまで問題となつてきている。環境問題の焦点がこのように移行した場合には、そこから導かれる思想的・実践的含意は、明確に自由主義と対立することになる。

今し方述べたように、自由主義が成り立つためには、「他者に危害を与えない行為の範囲」がすべての個人に対して定義されていなくてはならない。だが、今日の環境問題の見地からすると、環境にダメージを与えない行為は、したがって同じ環境の下に生きる他者に危害を与えない行為は、原理的には、まったく存在しないことになる。このことは、二酸化炭素の排出問題のことを思えば直ちに理解できるだろう。人間の任意の活動が——ただ端的に生きているということが——、直接的・間接的に大量の二酸化炭素の排出をもたらしており、環境に回復不可能な害を与えることになるのである。

地球環境の保持という理念と自由主義の理念との間の矛盾を、もう少し厳密に定式化してみよう。近代の思想は、人間が生きる空間が無限の広がりを持つことを、暗黙の前提にしていた。だが、地球環境問題は、われわれがその内部で生きている空間の容量が有限であるということ、つまりはるか以前から客観的な事実として十分に認知されていながら実践的な含意ある条件としては承認されていなかった地球の有限性ということ、われわれに自覚させる。この移行、つまり空間の無限性についての暗黙の仮定が、空間の有限性についての自覚的な仮定へと置き換えられたということは、とりわけ自由の理念にとつてジンダインの意味をもつ。無限空間の内にある限りにおいては、他者に危害を加えない行為の範囲を、必ず定義することができる。だが有限空間の内で行使された行為は、何らかの程度において、必ず同じ空間に内属する他者に危害をもたらすことになり、したがって、他者に危害を及ぼす行為、及ぼさない行為の分割は、原理的には不可能だからである（せいぜい恣意的な規約によつて、分割線を引くしかない）。

(10) 嫌煙権と比べてみれば、このことに納得することができるだろう。かつては喫煙は、自由な選択肢の内に数えられていたが、嫌煙権が広く認められている今日では、喫煙の自由は無制限には許されない。(煙草を嫌う) 他者が近くににいる限りにおいては、つまり狭い部屋に他者と共存している限りにおいては、喫煙は禁じられる。それならば、他者との距離をどの程度取つたらいいのか。つまりどの程度の広さの部屋の中ならば煙草を吸うことができるのか。

結局、喫煙が許容される広さと禁止される広さの間には相対的な区別しかありえない。言い換えれば、どのような部屋でも、狭いと認識された瞬間から、喫煙は禁止項目の内に入れられるだろう。地球環境問題に対する二〇世紀末以降の自覚は、まさに、地球という部屋が十分に狭いということの再認識にこそ端を発しているのである。

(大澤真幸『不気味なもの』の政治学』による)

注 パーリン……アイザイア・パーリン。イギリスの政治哲学者(一九〇九—一九九七)。

〔問一〕 傍線(1)(4)(6)(7)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(2)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 平等の理念を正しく実現するのに社会主義が失敗したこと
- B 平等の理念が自由の理念と原理的に相容れないこと
- C 平等の理念を完全に実現することが不可能であること
- D 平等は自由に対して従属的な位置づけしか持ち得ないこと
- E 平等を実現するために自由を制限する社会が持続可能でないこと

〔問三〕 傍線(3)「解消しがたい矛盾」とあるが、この内容を「他者」および「危害」という二つの語を用いて六〇字以内で説明しなさい。(句読点は一字に数える)

〔問四〕 傍線(5)「環境問題がこのような段階にある場合には、それは、自由主義と矛盾するものではない」とあるが、それはなぜか。次のアキのうち、筆者が考えるその理由として適当なものにはA、そうでないものにはBの符号で答えなさい。

ア カーソンは、農薬の散布が度を超すと、自由主義が禁止している他者へのいわれなき暴力を発生させてしまう、と指摘しているから。

イ ローマ・クラブは、資源枯渇を招く化石燃料の大量使用を戒めているが、これは化石燃料の使用の自由を必ずしも否定するものではないから。

ウ 自由主義であれば、ローマ・クラブが指摘する石油枯渇の後に人類がどうするべきか、知恵を出し合う源泉となつてくれるから。

エ 自由主義は農薬散布の自由を否定しないが、農薬散布により他者の自由が阻害されるなら、それを許容しないから。

オ 自由主義が禁止する行為にはさまざまな実例があり、カーソンはそれまで誰も気づいていなかった新たな実例を発見したのだから。

カ カーソンとローマ・クラブは、他者に危害を与えない範囲では何をやってもよい、という原則そのものに異議を唱えてはいないから。

キ カーソンとローマ・クラブは、ミニマムな定義に従う自由主義からさらに踏み込んで、より積極的な自由を提唱しているわけではないから。

〔問五〕

傍線(8)「客観的な事実としては十分に認知されていないながら実践的な含意ある条件としては承認されていないかった」とあるが、次のア〜カのうち、筆者が言う意味で「ある事柄を客観的な事実として十分に認知」しながら「実践的な含意ある条件として承認」していない実例として適当であるものにはA、そうでないものにはBの符号で答えなさい。

ア 千年前に巨大な津波で水没したところのある地域に、その事実を知らない人が居住する

イ 残留農薬の実態やその危険性を熟知している人が、無農薬栽培とは限らないイチゴを洗浄せずに食べる

ウ 飛行機事故の悲惨さやその発生確率を良く知っている人が、覚悟して飛行機に乗る

エ 煙草が健康に害を与えることを考慮して喫煙しようとしな

オ 自分のことは自分が一番よく知っていると考えて、他人の忠告に耳を傾けない

カ 節電しないと大規模停電が発生するが、自分ひとりの節電では大勢に影響しない、と考えて節電に協力しない

〔問六〕

傍線(10)「嫌煙権と比べてみれば、このことに納得することができるだろう」とあるが、ここで筆者は何を嫌煙権と直接的に比べているのか。もつとも適当なものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 他者に危害を加えない限りで享受されるべき自由

B 地球環境の恩恵を受ける際に配慮されるべき平等

C 人類の存続に最低限必要な自然環境を守る権利

D 地球環境そのものに固有に備わっている価値

E 他者が排出する二酸化炭素から自分の健康を守る権利

F 将来世代の生活基盤を守るために現代世代が果たすべき義務

〔問七〕 次のアイオのうち、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 社会主義が二〇世紀末にほぼ崩壊したのは、自由の理念に従って社会を形作っていく以外、われわれには選択肢がないことを示したが、社会主義が奉じた平等の理念そのものが誤りであったことを示したわけではない。

イ 地球環境の保護という理念は、地球上で生きるすべての人や生物を平等に保護することに通じるので、かつて自由の理念に道を譲った平等の理念が形を変えて二一世紀に再登場してきたものと解釈することができる。

ウ 他者に危害を加えなければ何をやってもよい、という自由主義のミニマムな原則は、他者に危害を加えない行為が具体的に何であるかを示しておらず、我々の行為指針として役に立たない。

エ カーソンやローマ・クラブが提起した環境問題は、自由の理念を維持しつつ克服されるべき課題であったが、地球環境問題は自由の理念がそもそも維持可能かどうかという疑問を突きつけている。

オ 嫌煙権は受動喫煙の健康被害から身を守る運動の中で認められてきた新しい権利であり、他者の喫煙の自由を制限しようとするものだから、自由主義のミニマムな定義に合致しない。



二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

インターネットは人間のメディア発展史上、電話やテレビと同等、あるいはそれ以上に画期的である。なぜなら、まず、文字、音声、静止画、動画という、ヒトが(1) 駆使している聴覚、視覚的情報をほぼすべてやりとりできる。それに伴い、新聞、雑誌、電話、映画、ラジオ、テレビといったこれまで人が発展させてきたメディアが提供してきたものと同等の情報が、ほとんどすべて受発信できる。

第二に、インターネットによる情報は一方的でなく、双方向的に、かつ一対一でも一対多でも自由に授受できる。さらに情報はサーバーやパソコンのハードディスクなどに保存できる。

第三に、ラジオ、テレビは公共的情報源を利用するため、国家等の「制度」から発信の制約を受けるが、インターネットでは原則的にそのような制約を受けず、個人が自由に情報発信できる。技術的には、プロトコルを規制することで、行政制度による管理も可能であったが、幸いにして一部の地域を除いて原則的には国家の規制を受けず、技術者主導の分散管理システムに委ねられた。ラジオやテレビの場合には、情報の授受にあたって「制度」とリンクした行政地域、さらには国家という空間的な障壁が現実存在しているが、インターネットの場合にはそれらが取り払われた。

第四に、新聞、ラジオ、テレビといったメディアの場合、そのコンテンツの制作や配給システムに膨大な資本力を必要とするのに対し、インターネットはそうした大きな資本力を必要とせず、その気になれば、個人の一台のパソコンから自分の意見や心情、制作作品などを世界中の半無限の人々に発信できる。また、情報の受容についても、新聞や雑誌のようにパッケージごとのコストやテレビ受信料のようなものはいらず、多くの情報、コンテンツが実質的に無料で享受できる。

このような特性から、インターネットは、メディア発展史上、文字の発明以降、最大級の社会的影響を与えるものであり、現実には我々の産業形態、生活を大きく変えつつある。

また雑誌、書籍、新聞、テレビなど既存のメディアのあり方にも変化が生じ始めている。これまで、日刊新聞、ラジオ、テレ

ビなどの登場と普及は、それまでに存在したメディアを壊滅させることなく、むしろ共存の關係にあり、相乗効果的に発展してきた。しかし、インターネットは、(2)。

テレビは人々の主観的環境を均質化する方向に影響をもつメディアであった。画面上で展開されるシーンは、都市で見ても農村部で見ても同じであり、同じ番組を見る限り、大人も子どもも同じものを見るからである。テレビによって、子どもは容易に大人の世界を垣間見られるようになった。情報環境という意味では、テレビは大人と子どものギャップを埋めた。

インターネットも、原理的には誰でも同じコンテンツに触れることができる。「子どもが大人の世界を垣間見る」という点では、テレビの場合以上に「禁断の世界」すらぞき見る子どもが出てきた。

しかし、テレビから送られてくる情報は限られており、少なからぬ時間、多くの番組を家族が一緒に視聴するのに対し、インターネットの情報量は無限に近い。その情報にパソコンや携帯電話を通して様々な場所でアクセスするから、単独で接触する機会が多い。結果的に、受容するコンテンツは一人一人バラバラである。インターネットは、人々の話題を拡散する方向に作用する。また、メールやSNSともなると、家族の間でも、そのやりとりの相手、内容はお互い知ることではなく、もとより会話が少なく紐帯感ちゆうたいが低い家庭においては、家族の結びつきがさらにバラバラになる可能性もある。

インターネットには、家族や同世代の仲間の絆きずなを強める働きがある反面、家族や世代内のつながりの中に、モザイク化した多くの孤島を作り出してしまふ危険性をはらむ。

インターネットは、ほとんどコストをかけず、誰でも直接大衆に自らの表現物や意見を提供できる。実際、これまでにあり得なかつたプロセスで、いくつもの作品が若者らの間で評判を得たり、ブログ発の、単なる一市井しせい人の主張がネット利用者の多数から支持されたりしている。

従来は、既成の文化装置（出版社や音楽プロダクションなど）の選別を受け流通経路に流され、主張や思想であれば、既存のマスメディア的権威（新聞社や出版社、放送局など）の編集を経て初めて大衆の目にさらされていたものが、それらを通らず世に送り出されることが可能になった。

ネット発信の産物が受け入れられるか否かは、既存のマスメディア的権威ではなく、直接「ネット利用者の嗜好」に委ねられる。こうした新しいプロセスは、専門家集団として、その地位を保っていた既成のプロやマスメディア組織の権威の根底を揺るがすものである。

また、政治家がテレビを通さず、直接 YouTube やその他の動画中継サービスで意見を表明したり、企業や政府の機密を公開するウィキリークスが登場するなど、新しい情報の流れが形成されようとしている。

インターネットの場合、そうした情報は、基本的に利用者のアクセス数で評価されることが多い。しかし、テレビにおいて、視聴率が番組の質の指標になるものではなく、場合によっては低俗化を促す側面があるのと同様、アクセス数や検索での上位表示は、内容の質を保証しない。また、ウィキペディアのような「衆知」は必ずしも「叡智」とは限らない。既成のマスメディア的権威は、玉石から玉を拾い出し、さらにそれを磨きあげる機能も担っていた。

新しいネット文化に求められるのは、一つにその真贋や質を評価する新たなシステムの構築である。しかし、そのシステムすら、ネット上ではシムテムを熟知した少数のデマゴグが操作するものに堕しかねない。とくに「(4)」ことが何より大事とされるような日本にあつては、異論、少数派も排除・軽視せず、それを支持する意見が抑圧されない風土の再構築と、大勢に流されない個々人の鑑識眼の育成が喫緊の重要課題であろう。もっとも、これはメディアの問題とは次元を別にする文化そのものの問題である。

(橋元良明「メディアと日本人」による)

注 プロトコル……インターネット上の通信規約を定めたもの。      コンテンツ……情報内容のこと。      SNS……Social

Networking Service の略。人々のつながりをサポートするウェブサイト。      YouTube……アメリカ合衆国のカリ

フォルニア州にある動画共有サービス。二〇〇五年に設立された。      ウィキリークス……匿名で機密情報を公開する

ウェブサイトの一つ。      デマゴグ……民衆扇動家。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 空間的に
- B メディアに
- C コミュニケーションに
- D 感覚的に
- E 時間的に

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 既存メディアに活力を与える驚異的起爆力をもっている
- B 既存メディアの存在自体を脅かす潜在的破壊力をもっている
- C 既存メディアの存在とは異質な爆発的な創造力をもっている
- D 既存メディアと共存することができる柔軟な応用力をもっている
- E 既存メディアと競合しても勝ち抜く圧倒的な生産力をもっている

〔問三〕 傍線(3)「モザイク化した多くの孤島を作り出してしまふ」とはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを

左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 同じ情報に接しているのに、皆がそれぞれ異なった受け取り方をする事
- B ひとりで自由に情報を受信する機会が増えるので、嗜好が画一化されないこと
- C 多くの情報のなかから、個人の好みで情報を取捨選択することができること
- D 受容する情報が多種多様化する反面、受け手の間で共通の話題がなくなる事
- E 親しい者の間でも、他者が得ている情報内容がわからず不安になってしまうこと

〔問四〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 相手に同意する
- B 場に馴染なじむ
- C 沈黙ちんもくを守る
- D 本音を吐く
- E 空気を読む

〔問五〕 次のア～オについて、本文の筆者の考えに合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で

答えなさい。

ア テレビは情報環境という点では都市と農村、大人と子どもなど、地域や世代間の差異を埋める役割を果たした。

イ インターネットから発信された情報が受容されるか否かは、社会の変化のプロセスを熟知した少数の専門家集団の権

威による。

ウ 既存のマスメディアの権威は多くの情報から良質のものを選んだが、情報の真贋に対しては不問に付した。

エ ネット文化には大勢の意見に振り回されない鑑識眼や情報の質を見極める評価システムが求められる。

オ 企業や政府の機密を公開するウィキリークスのような新しい動きがこれからのネット社会には必要である。

三 次の文章は、『建礼門院右京大夫集』の一節で、出家して大原の寂光院に入った建礼門院を、作者右京大夫が訪ねた場面である。これを読んで、後の間に答えなさい。(30点)

女院<sup>(1)</sup> 大原におはしますとばかりは聞きまゐらすれど、さるべき人に知られではまゐるべきやうもなかりしを、深き心をしるべにて、わりなくてたづねまゐるに、やうやう、近づくまゝに、山道のけしきより、まづ涙は先立ちて言ふ方なきに、御庵のさま、御住まひ、ことから、すべて目も当てられず。昔の御有様見まゐらせざらむだに、大方のことから、いかがこともなめならむ。まして、夢うつつとも言ふ方なし。秋深き山おろし、近き梢<sup>(2)</sup>に響きあひて、懸樋<sup>(3)</sup>の水のおとづれ、鹿の声、虫の音、いづくものことなれど、ためしなき悲しさなり。都ぞ春の錦を裁ち重ねてさぶらひし人々、六十余人ありしかど、見忘るるさまに衰へはてたる墨染めの姿して、わづかに三四人ばかりぞさぶらはるる。その人々にも、「さてもや」とばかりぞ、我も人も言ひ出でたりし、むせぶ涙におほはれて、すべて言も続<sup>(4)</sup>けられず。

今や夢昔や夢とまよはれていかに思へどうつつとぞなき<sup>(5)</sup>

仰ぎ見し昔の雲の上の月かかる深山の影ぞかなしき<sup>(6)</sup>

花のにほひ、月の光にたとへても、一方には飽かざりし御面影、あらぬかとのみたとらるるに、かかる御事を見ながら、何の思ひ出なき都へとて、されば何とて帰るらむと、うとましく心憂し。

山深くとどめおきつるわが心やがて住むべきしるべとをなれ<sup>(7)</sup>

〔建礼門院右京大夫集〕による

注 女院……建礼門院のこと

〔問一〕 傍線(1)「深き心をしるべにて」、(2)「わりなくて」、(8)「やがて住むべき」の解釈として、それぞれもつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 深き心をしるべにて

- A 女院の思いやり深さを頼りとして
- B 女院の思いやりを知った上で
- C 女院を深く慕う心を導きとして
- D 女院を思う心の深さを知る人として

(2) わりなくて

- A お会いできぬまま困って
- B お会いしなければならず仕方なく
- C お会いしたくてやむにやまれず
- D 必ずしもお会いしたいわけでもなく

(8) やがて住むべき

- A これからすぐに都に引き返す
- B そのまま出家して大原に住む
- C これから大原にだけ住み続ける
- D 大原から直接都には帰らない

〔問二〕 傍線(3)「昔の御有様」を具体的に示すものとして、合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 秋深き山おろし、近き梢に響きあひて、

イ 都ぞ春の錦を裁ち重ねてさぶらひし人々、六十余人

ウ 墨染めの姿して、わづかに三四人ばかりぞさぶらはるる

エ むせぶ涙におぼはれて、すべて言も続けられず

オ 花のにほひ、月の光にたとへても、一方には飽かざりし御面影

〔問三〕 傍線(4)「大方のことながら、いかがこともなのめならむ」とはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 大原の女院の様子を、なんといい加減に見過ごしてきたのだろうか。

B 大原で女院にお目にかかれたことを、どうして普通のことだと思えるだろうか。

C 大原での女院のお暮らしぶりを、どのようにしたらひと通り見渡せるだろうか。

D 大原での女院のお暮らしぶりを、どうして並みひと通りのことだと思えるだろうか。

E 大原の女院のなさりかたを、どうしたら平気でやりすごせるだろうか。



## 〔問四〕

傍線(5)「いづくものことなれど、ためしなき悲しきなり」は、どのようなことか。その説明としてもつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 秋は都の方が大原よりもおもむき深いが、私には都の秋がむしろ悲しく思われる。
- B 都でも山里でも秋のさびしさは同じはずだが、私には大原の秋は悲しく思われる。
- C 都よりも大原の秋はいっそうさびしいはずだが、私にはむしろおもむき深く思われる。
- D 山里の秋のさびしさは、どこでも同じはずだが、私には大原の秋がこの上なく悲しく思われる。
- E 秋のおもむき深さは、所によってそれぞれことなるが、私にはどこでも変わらず悲しく思われる。

## 〔問五〕

傍線(6)「いかに思へどうつつとぞなき」とは、だれのどのような気持ちか。その説明としてもつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 女院は、現実を受け止めきれないで、落胆してしまっている。
- B 女房たちは、昔をなつかしむほかない、と悟りききっている。
- C 女房たちは、昔のことも今のことも区別がつかず、とまどっている。
- D 作者は、どう考えても現実のこととは思えず、とまどっている。
- E 作者は、今も昔に変わらない暮らしをしたいと願っている。

## 〔問六〕

傍線(7)「かなしき」、(9)「なれ」の活用形をそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 未然形
- B 連用形
- C 終止形
- D 連体形
- E 已然形
- F 命令形

